

〔秋田大学
教養基礎教育研究年報
81—84 (1999)〕

「初年次ゼミナール」メカノワールド実施の背景と課題

大好 直

1. 新入生に目的意識を

異境に引っ越して新しい生活を始める時は、新天地に来た解放感と、希望に満ちた将来への晴れやかな思いがあるだろうし、また、生活に慣れるまで戸惑いも多く、異常なストレスを受ける場合もあるだろう。大学に入学したての時もそれに似ている。新入生は、受験生であったという境遇からの開放でもあり、環境の変化に戸惑い、心も非常に大きく揺れ動く時だろう。それまでの価値観が入学試験の得点を上げることのみに絞られ、それ以外の価値観が否定される中で訓練を受けて来ている。したがって多くの新入生は、入試に合格した喜びに浸ることは出来ても、目標達成後の価値観が分からなくなり、ただ受験戦争から解放された虚脱感のみが残る。本来ならば受験する前に、その大学へ進学しようとする「自分の目的」を持つべきなのであるが、昨今の歪んだ人間社会の影響を受け、現実は目的を考える余裕もなくなって来ている。そして具体的な努力目標が分からずそのまま入学することが、本人の迷いの原因となっているばかりでなく、正常な大学教育を行うための負担も大きくしている。もし多くの新入生が「大学に入れたのだ。何々をしてやるぞ」と意気昂揚するようであれば、現在、大学が直面している大部分の教育問題は解決してしまうだろう。しかし、現状を理解すれば、直視して対応を考えなければならない。新入生にありがちな不安感や恐怖心は、人としての経験や知識不足のため「先読みが出来ない」ということにある。単一の価値観の中で青春時代を過ごし、多様な考え方を学ぶ機会に恵まれなければ、心の問題として自己解決する選択肢が乏しくなり、その結果として客観的に正常な生活を送ることが出来なくなる。これは「自ら判断し、自ら行動し、自ら律して生きる力の欠如」である。このような状態をいつまでも大学生活を送る間、ずっと引きずっていては問題である。そこで、本学の教養基礎教育科目として履修すべき必修科目に「初年次ゼミナール」という一連の新入生教育カリキュラムを準備し、新入生に目的意識を持たせる機会をつくっている。

2. 多様性を学ぶメカノワールド

筆者の関係する機械工学科では、特徴あるシラバス⁽¹⁾の内容から「メカノワールド」と称する「初年次ゼミナール」を新入生にしている。これを実施する目的は、卒業までに悔いのない大学生活をさせることにある。その方策や概要はシラバスを参照していただくが、最初に行う学生同士のブレーンストーミングでは「大学卒業まで何をしたらよいか」を議論のきっかけとして与えた後、各グループ毎に具体的なテーマを決めさせて、そのテーマの課題を解決していく方法を考えさせる。そして最後にその解決方法をまとめてグループ毎に発表させるものである。自分で課題を見つけることや、多様な答えが可能な問題は、受験勉強ではほとんど出題されない問題であり、その解答の多様性を経験されることによって、価値観が人によって異なることを認識させる第一歩としている。また、自分の言葉で皆の前で発表させる過程が大切で、

その行為によって自分の答えを正解とするのである。自分で出した答えなら、抵抗なく実行に移し努力することが可能になるからである。時代と共に社会環境が変わり、学生気質も移り変わって自我意識が極めて希薄になりつつある。このような時であるからこそ、かけがえのない青春時代に、しなければならない事を積極的に考えさせることが重要であり、このような本学の教育科目群が、効果の上がる教育活動の一つとなることを期待している。

いろいろな仕事の機会に遭遇する異分野の議論に対して、「はてな、何処かで同じような議論をしたかもしれない」という思いになったことはないだろうか。深浅はあっても、一応、すべての人々が教育評論の許される昨今なので、教養教育はこうでなければならないと、いろいろな提案もできるだろう。しかし定義等はその道の専門家に任せるとして、「何処かで同じような議論をしたかもしれない」と感ずることは、その人が異分野へ溶け込んで行ける第一歩であり、またそのような一つ一つの思いは、多様な人間社会に対応できる「度量」だと思われる。いろいろな考え方があるが、これは「教養の力」を示す一つの側面であり、百科事典的に知識博学であることだけでは説明の付かない「人間的な思考展開の、場面に応じた柔軟さ」に通じているように思う。これらの力を育てる原点は「知りたいという欲求、もしくは好奇心」であろう。そこで、メカノワールドの開講に際しては、学生の自我意識を深めるためのインセンティブと好奇心を起こさせる効果的な方策を考えた。その結果、最も新入生が関心を抱く分野の話題を選ぶことになる。すなわち、入学希望先として機械工学科を選んだ学生には、機械工学に関係した先端の話題を聞かせることになる。話題が発展して、専門にまつわる色々な社会情勢の話もある。環境問題や技術者倫理の話もあるかもしれない。好奇心から興味をもって話を傾聴するようになれば、その学生はキャンパスが楽しくなり、他の講義にも積極的になる場合が多いだろう。「好奇心から発する意欲が第一」であり、そうなれば学習方法のノウハウは、個々に教えなくとも自己修得するものである。メカノワールドはそのような導入教育であり、心が不安定になりがちな新入生に、大学生として有意義に送ってほしい、大学のキャンパス生活を生き生きと送ってほしいという願いが、少しでも叶えられれば実施した甲斐がある。一旦、軌道に乗って目的意識も新入生に芽生えれば、その後の活動に良い効果を与えることになる。更にこのことが、学生自身の意志に基づいて将来に渡って自己教育し、見識のある人格を形成して行く動機となればよい。

3. 教養と専門

メカノワールドは、機械工学科の専門を久しく担当してきた複数の教官にお願いしている。そのような事情やテーマ等から専門科目に属するのかという問い合わせもある。確かに専門に関係する話題を中心にして実状を紹介することになっているが、体系だった専門科目ではない。その「効果において」は教養科目になっている。メカノワールドで専門分野における話題を羅列しても、専門として論理だった内容の習得にはならないし、その限られた断片的な知識を持っていても、いわゆる「物知り」で終わってしまうからである。専門が細分化されていく今日において、複数の教官からなるオムニバス方式の講義内容の体系化は、それらの従来の専門とは異なった「新しい横断的な視点」が生まれない限り非常に難しい。したがって、専門教育とはなりにくいと言わざるを得ない。では、教養とはどのように理解しておいたら良いだろうか。

たとえば弁護士、医師、技師など将来専門家として活躍することを期待するならば、もちろん、それぞれの専門を勉学し、深く極めることが必要である。しかし、人間社会の一員であると考えたとき、専門以外のいろいろな「人としての条件」が必要である。また個人として「人として満ち足りた一生を送るためにの条件」も必要である。これら条件を揃えるためには、バラ

ンスのとれた人間として生きるための、正しい見識がなければならないだろう。その見識は、経験によって育まれた正確な価値評価と判断能力に裏打ちされたものであり、そのような人が教養を持ち合わせていると言えるのかもしれない。したがって大学の短い在学期間だけで、教養教育は完了するものではない。しかし、そのような教養として将来に渡って自己教育して行く最大の動機は、二十歳前後にあると思う。その根拠は理屈に対する目覚めである。批判精神と共に自分の専門とは関係なく、好奇心で覗きたくなる時期であり、それはちょうど大学に在学している時に当たる。このようなことから、教養教育として「いつどのように種を蒔くか」の判断は非常に重要なのである。近年の学生が批判精神に目覚める時期は、いろいろな事情から一般に遅れ気味になっているかもしれない。また内容によっては専門が深まってしまうと、自分の問題ではないと関心を示さなくなる傾向も考えられる。本来、教養教育は、授業のみならず大学生活すべての活動の機会を捕らえて行うことが可能なのであるが、その効果を配慮すれば、学生に最も感動の与えられる時期はいつなのかを考えるべきかもしれない。これは色々な絡みがあって難しい問題である。しかしながら、特に理工系学生に対して言えば、人間社会との関係において自分の専門を良く理解するためにも、「異分野から見つめ直す能力と余裕」を、「専門に深く染まる前に」心がけて養うべきであるということである。長期的に考えると、その方が専門の研究方向を正しく選ぶことができ、社会に受け入れられる専門家として成長することが期待できるからである。専門と教養の線引きをすることは例外が多くすべきではないのかもしれないが、便宜上、仕事をするために「専門」が大切であり、良い生き方をするためには「教養」が大切なのであると割り切ることも出来る。

4. 課題

この度の「初年度ゼミ」に対する学生アンケートの結果⁽²⁾は、授業改善のための貴重な手掛かりを与えてくれる。機械工学科の1年生在籍者は85名であるが、4月に受講登録したものは84名であり、登録者全員のアンケートを回収することが出来た。同学科で行った「初年次ゼミ」メカノワールドは、シラバスからも分かるように、4月と5月の学内外のオリエンテーション時にも行っているので、2単位相当分の授業は6月で終了している。「初年次ゼミ」への出席率は大変良く、9割以上出席したと回答したものは84.52%となっている。結果を総合すると、学生はゼミに対する興味と参加意欲を持ち、各教官の準備、計画、工夫、熱意を敏感に受け止めている。好調なスタートであると言える。しかし、そのような中でも、検討しなければならない課題が見えている。

1対1の有意義な問答によって、経験者から未経験者へ多様な知識や方法を伝承する形が教育の原点の姿であろうと思われる。教官と学生との関係もある意味でそうありたいものである。しかし、ほとんどの大学教官は、例えば教室という便宜的な場を利用して、一度に多数の学生を見なければならない。その1対1という状況から遠く掛け離れている現実が、両者間の繋がりのみならず学生の授業に対する参加意識を希薄にしている要因となっている。これを改善するためにはクラス規模を小さくすることであろうが、可能な当面の手立ては、学生との対話の機会を積極的につくっていくことだろうと思われる。アンケートで「ゼミで質問や発言をしたか」の設問は、これらに関連して非常に重要である。その集計結果は、授業として望ましい形になっているかどうかを検討する一つの指針になるからである。学生の積極的な発言は、適度で適量の内容が正確にトスレスのかからない形で学生に伝わっている時に可能なのであり、学生の資質に応じた望ましい授業を実現するための良い手掛かりになる。

アンケートで学生84人中「質問や発言をしたと思う」と回答したのは8人で少ない。この結

果は、昨今の学生気質から予想は出来ることではあっても積極性に乏しく不満である。「質問や発言をしたかったと思う」と回答したものが40人いたことを考えると、真摯に受け止めてどのような改善策があるか考えなければならないだろう。

(おおよし ただし 機械工学科)

参考資料

- (1) 平成10年度秋田大学教養基礎教育授業計画（シラバス），14頁
- (2) 平成10年度教養基礎教育アンケート「初年次ゼミ」，アンケート集計表